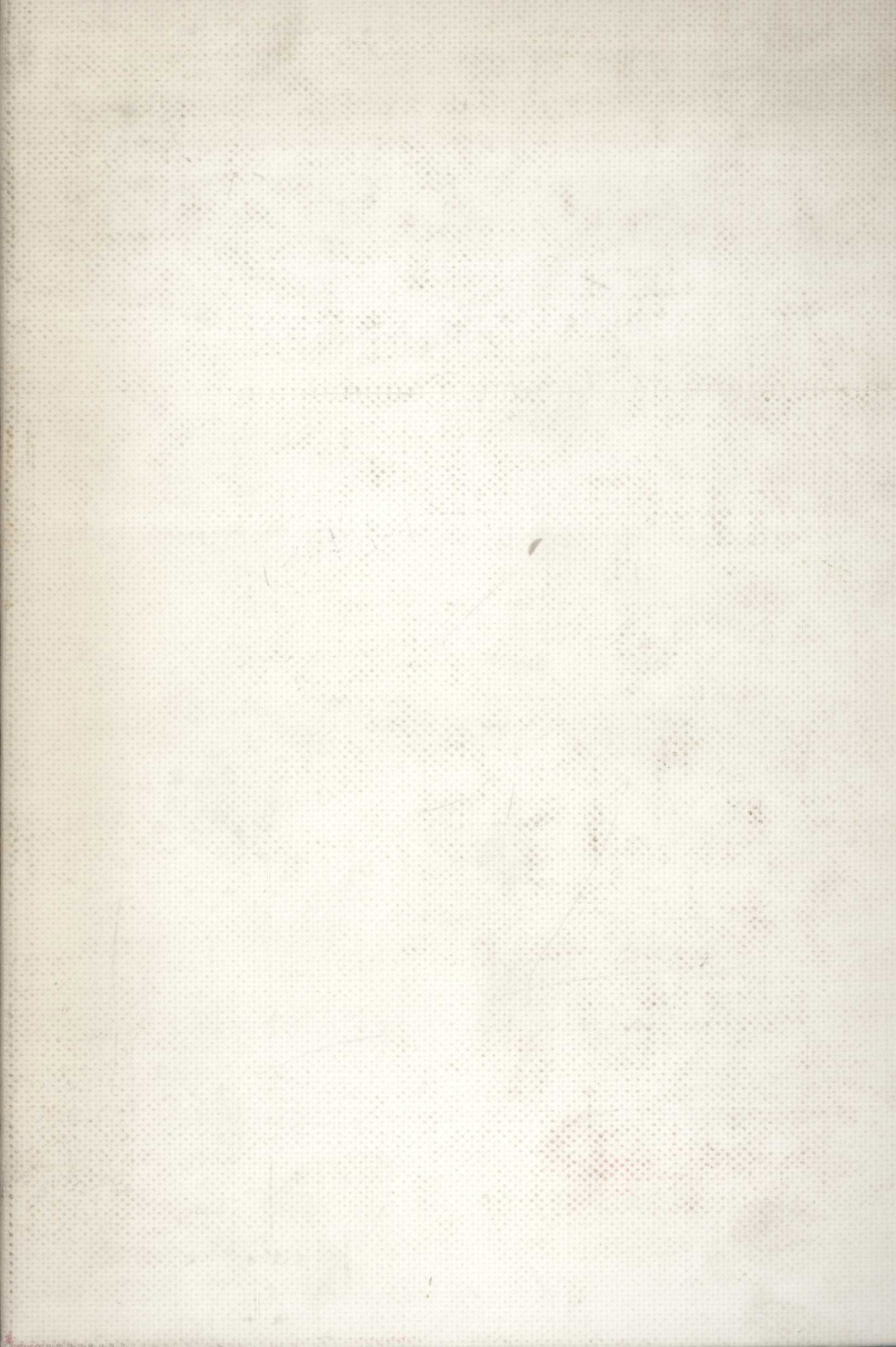




阿田繁吾郎の歌

昭和五六年三月二五日 印刷  
昭和五六年三月三〇日 発行

定 価 二 千 円

編 者 西田幾多郎  
博士 頌徳会

発行者 岸村正路

印刷者 矢部富三

発行所 東京都千代田区西神田二丁目四番六号

株式会社 南窓社

## まえがき

西田幾多郎先生には、『善の研究』にはじまって『場所的論理と宗教的世界観』に至るまで数十編の哲学的論文がある。この偉大な業績は周知のことであるが、これとともに千点に余る「書」と二百首に近い「歌」のあることを忘れてはならない。

哲学論文は江湖の与望に应えて、岩波書店の数回に及ぶ出版によりあまねく浸透している。また「書」は先生の高弟の方々の努力によって、燈影舎より『西田幾多郎遺墨集』として世に出された。今一つ「歌」は、昭和二十三年に三女静子さんの編で『父西田幾多郎の歌』が明善書房より出版されている。だがこの本は発行部数も極めてすくなく、今では貴重な歌集として散見されるのみである。頌徳会ではこのことを遺憾として数年前から歌集の出版を考えていた。

先生は昭和八年に「短歌について」という小論を歌誌『アララギ』に寄せておられる。その中に「短歌には短歌の領域がある。私は短歌によつては極めて内面的なるものが言ひ表されると思ふ」

と書いておられる。また歌人島木赤彦とも関わりが深かった。更に先生の京都旧邸書斎「骨清窟」の書架には六種類の万葉注釈書や歌書が多く残っていた。そうしたことからも先生の短歌造詣の程を窺い知ることが出来る。

先生の七十五年の生涯は決して安易平坦なものではなかった。思索と瞑想による哲理究明の歩みもさることながら、悲苦に満ちた波乱の私生活も見逃がすことは出来ない。それらのことを最も端的に表現されたものが先生の歌であって、そこに人間西田の片影を見ることが出来る。先生をより深く知っていただけならばと思いあえて上梓することにした。

本書は先生の日記、書簡、遺文、遺墨等を渉猟し、出詠時の環境や周辺、更に家庭内の事情等を簡潔に書きそえて解説とした。また出詠時を想起するよすがともなる写真若干をも挿入した。

出版に当っては、町当局はもとより、上田久氏をはじめとするご遺族の方々や、校閲を担当していただいた橋本芳契博士、写真撮影に協力をいただいた富沢省三、杉本清両氏並びに指導助言を賜わった各位に深甚の敬意と感謝を捧げる。

ささやかな本書ではあるが、西田先生の遺徳顕彰と歌人西田幾多郎をご理解をいただければ私のよろこびとするところである。

最後に本書刊行を好意的にお引き受けいただいた南窓社に心から御礼申し上げたい。

昭和五十六年早春

西田記念館長 上杉知行



# 目次

まえがき

西田記念館長 上杉知行

明治の頃

11

最初の海

出郷

和歌山、奈良の旅

金石の海

故郷の山

大正時代

23

「謙」死す

子を憶う

妻をあわれみて

子の夢

憂い

夏草

悼 宝林師

亡き母

友子

野の草

人生

残れる命

留学の友に

犬

秋

妻逝く

挽歌

無情

婦郷

さすらい

一周忌

白樺

虫

昭和になつてから

73

散歩

娘

退職

孫

付  
録

|           |        |     |        |
|-----------|--------|-----|--------|
| 鎌倉雜詠      | 海二首    | 天地  | 春愁     |
| 北条時敬先生    | 椅子とベッド | 老   | マルクス   |
| 月見        | 幻      | 春来る | 広島     |
| 音無川       | 君がみ胸   | 薦紅葉 | 人は人    |
| 信濃哲学会     | 椎茸     | 早春  | 七里ヶ浜   |
| 星         | 友の不幸   | 陸奥  | もんべ    |
| たらちね      | 喜寿に贈る  | 古稀  | 白髪     |
| 月見草       | 妹      | 病の歌 | 山本良吉死す |
| 補遺<br>トロヤ |        |     |        |

『西田幾多郎の歌』序

短歌について

島木赤彦君

鈴木大拙

西田幾多郎

西田幾多郎

あとがき（並に扉題字）

西田幾多郎博士  
頌徳会常任理事

文学博士 橋本芳契



西田幾多郎の歌



明  
治  
の  
頃

\* 最初の歌

明治二十一年、十八歳。先生は、第四高等中学校第一部一年に在学しておられる。翌二十二年五月、級友、藤岡作太郎（東圃）、松本文三郎、鈴木貞太郎（大拙）、金田（山本）良吉らと、「我尊会」を結成し文集を作り互いに切磋勉励した。その頃先生は、自分の筆名を、有翼、梅陰有翼、嘲世山人として、漢詩、時事論、随想などを書いておられる。その「我尊会有翼文稿」の中に、先生の最初の歌として次の一首がある。

暮 雁

1 夕暮に急げるかりは松虫の声する方にやどる為  
にや

余昨夜始作歌乃書

「我尊会有翼文稿」の中に、少し風が変わった、狂歌に近い歌が二首ある。若き学徒西田青年の  
一側面がうかがわれて面白い。

2 年ぐれにとしがゆくとは思ふなやとしは毎日毎  
時ゆくなり

3 すみ駿河硯の水は大井川画き出せるふじの高峯

次に、「梅」の歌が二首、「偶感」と題した一首である。

4 住む人があるじとぞいへば梅の花なく鶯やある  
じなるらん

5 まどのとにうつる木の影香ふればさきぬる梅の  
こかげなるらん

6 春ごとに草木はもとに反れども反らぬものはわ  
が身なりけり